

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

卒業研究支援としてのオーダーメイドガイダンス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): User Education, Document Retrieval, Reference Interview 作成者: 伊東, 泰子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/571

卒業研究支援としてのオーダーメイドガイダンス

伊東 泰子

ITO Yasuko (The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing Library), Information Searching Guidance on Demand as a Support System for Graduation Research. *Nursing and Information* 2016;23:27-31.

キーワード: 利用教育, 文献検索, レファレンスインタビュー

Keywords: User Education, Document Retrieval, Reference Interview

I. はじめに

日本赤十字九州国際看護大学図書館（以下「当館」）では、開学初年度の2001年以降、学生の情報リテラシーの向上を図るため、試行錯誤を繰り返しながら学年ごとの段階的かつ計画的な文献検索ガイダンスを実施してきた。

従来、すべての学年において多人数で実施していた一斉ガイダンスの形式を見直し、2008年から学部4年生に対して「卒業研究」の科目支援として「オーダーメイドガイダンス」と称する1対1の個別ガイダンスを実施している。

本稿では、個別ガイダンスの実施に至る経緯とその支援内容、実施後の反省点及び今後の課題について報告する。

II. 実施に至る経緯

日本赤十字九州国際看護大学（以下「本学」）は、学部、研究科ともに看護学の単科大学であり、その構成員数は、2015年5月1日時点で学生477人、教職員125人である。当館では、学生、教職員のほか、卒業生及び地域住民、近隣の医療・福祉従事者にもサービスを提供している。総面積905.8㎡（うち開架スペースは738.5㎡）の小規模図書館で、受付カウンターで貸出、返却、相談業務を行っており、独立したレファレンスカウンターはない。カウンターの近くにあるAV・PCコーナーでレポート等を作成している学生から呼ばれて、その席で相談を受けるといったこともしばしばである。

2001年から2007年まで、学生の情報リテラシー強化の対策として学部生への文献検索ガイダンスをすべて多人数の講義形式で実施していた。各文献データベースについて、学年ごとに複数回ガイダンスの機会を設けることにより細部の機能に亘って繰り返しの習得ができるよう意図して実施しており、この方法によって検索技法に関

する学生の理解も深まり、一定の成果はあったと認識している¹⁾。なかでも3年次前期には、必修科目である「看護研究方法」の授業に関連した文献検索ガイダンス（和・洋の各種データベース）を申込制で実施しており、これは現在でも継続している。申込制とはいえ、シラバスに記載された教員のメッセージ欄には「図書館でのデータベース検索ガイダンスは本科目受講の前提です」とあり、参加について評価に加味すると授業時間中に明言されている。このため、3年次前期における出席率（2015年度）は全ての文献検索ガイダンスを合計すると97.1%であった。

しかし、多人数で実施する一斉ガイダンスにおいては、文献データベースの操作方法等を習得するような場合には有効に機能するが、個々の学生のニーズに細かく対応することは困難である。特に卒業研究を控えた3年次の終わりから4年次にかけての学生には、説明後に設けた演習時間中における個別の対応が追いつかず、学生が十分な満足感を得られないままにガイダンスを終了することが多かった。

一部の文献データベースに関しては、提供元である業者に利用講習会の講師を依頼することもあった。最新かつ正確な製品情報が得られるという点では図書館として大いに利点があったが、内容は製品の操作説明の域を越えず、提示される検索事例と学生のニーズに多少のずれが生じることもあり、利用教育という面では有効性に欠ける面があった。技術の習得から一歩進んだ、学生個人の情報要求に応じた支援が必要だと感じていた。

当館で文献検索ガイダンスを実施し始めた2002年時点では、検索行為自体に学生があまり慣れておらず、文献データベースの画面構成や機能を一通り説明し、2、3の検索事例を示すことでガイダンスの形を成すようなところもあった。また、当時はOPACの画面設定も簡易画面をデフォルトとしてGoogleライクな外観に設定しており、学生にとっていかに文献検索への敷居を低くするか腐心していた。当然、利用者としての学生はそれに慣

れ、研究のための文献検索に各種データベースの検索システムを利用する場合にも、思いついたキーワードを検索ボックスに入力しヒットした結果の多さ（あるいは少なさ）にあまり疑問を持たない。その姿勢に違和感を覚えていた。文献検索に関して、諏訪²⁾は、その手法には「発見的検索」と「系統的検索」の2種類があると分類しているが、当時覚えていた違和感は、学生の発見的検索指向への偏りに対する危機感のあらわれであり、以降の数年は、系統的検索指向への転換をどのようにして図ることができるかを模索していた時期であった。

多人数で実施する一斉ガイダンスに限界を感じていたこともあり、4年次の卒業研究の科目支援として、学生個々人の卒業研究テーマに応じて予約制で実施する個別ガイダンスを2008年4月に開始した。

Ⅲ. 個別ガイダンスの概要

実施対象の学生は4年生全員（1学年100人定員）である。本学では、卒業研究は4年生の必須科目であり、例年、3年次末に指導教員が決定し、年度によって幅はあるが、論文の提出期限はおおよそ4年次の10月末から11月末頃に設定されている。

実施時期は、卒業研究の科目が始動する4年次の4月中である（表1）。2015年度は希望者多数のため、5月末日まで延長して実施した。実施可能な時間は、平日（月曜日から金曜日まで）の13時30分から17時までの間としている。1人あたりの時間は、短くて15分から、最長で2時間程度の長さになることもある。

実施場所は、図書館1階のAV・PCコーナーという座席数30席のオープンスペースの中の、学生が希望する席で実施する。

実施自体は1対1の個別で対応しているが、申込みはゼミ単位としている。これは、卒業研究の指導が始まったばかりの4月当初は、ゼミの中での進度がほぼ同じであることや、1人では申込みしづらいが、同じゼミに所属

する複数名での参加だと申込みし易いという心理面を考慮してのことである。申込方法は基本的にメールとし、所属するゼミの教員名や研究テーマとともに、実施希望日時を第3希望まで記載することとしている。

個別ガイダンスを担当するのは、いずれも司書資格を有する職員3名（うち1名は嘱託職員）である。日頃からの準備として、3名のうち1名の職員は、新着雑誌のコンテンツに必ず目を通し、カレントな文献を見落とさないようにしている。学生から提出されたテーマに関連の高い記事を見つけた場合は、担当する職員へ報告する。また職員間で同記事を回覧することもある。日常的に情報を共有し、新しい知識・技術の情報を交換して相互の研鑽を意識的に行っている。

1人の職員が当年度中に担当する分野やテーマは、なるべく同一または類似のものとなるよう分担している。当該テーマに関する研究動向を熟知することができ、新たに得た知識を次の学生の相談にも活かせるという利点と、少人数で数十名の学生の個別相談に応じるためには省力化を図らねばならないからである。年度始めの忙しさはどこの図書館（室）でも同じだと思うが、当館でも新入生のガイダンスや新任教職員への対応など、4月は1年の中で最も慌ただしい時期である。このような時期に個別ガイダンスを実施するのは、職員にとってかなりの負担であるが、卒業研究を始めるこの時期が、個別ガイダンスを実施するのに効果的であるため、多少の負担はやむを得ないと判断している。

Ⅳ. 事前準備

図書館宛てにメールで申込みが届いたら、テーマや希望実施日時によって担当する職員を決定し、速やかに申込者へ返信する。

職員の共有フォルダ内の申込一覧表には、実施予定日時と氏名、所属するゼミの教員名、申込時点の研究（探索）テーマ、担当する職員名を入力する。

事前準備として、職員は、まず担当する学生の過去3年間のガイダンス出席状況を参照する。当館では、必修または申込制にかかわらず、1年次から3年次までに実施したガイダンスについて、学生の個別の出席状況をすべて記録している。これにより、個別ガイダンスを実施する前に、その学生が文献データベースを用いた検索技術に習熟しているかどうか、おおまかな予測を立てることができる。

次に、学生から提示されたテーマや現時点の疑問・課

表1. 個別ガイダンスの概要

対象	学部4年生
実施時期	4年次4月～5月
対応時間	平日13時30分～17時
所要時間	15分～2時間程度
実施方法	1対1
実施場所	図書館1階AV・PCコーナー
申込方法	ゼミ単位でメールによる

題が記された文章から、主題を読み解き、キーワードを抽出して、データベース別の検索結果をA4用紙1枚程度にまとめたシートを作成する。このシートは担当職員自身の覚え書きであるが、ガイダンス時に学生へ示したり、求めによっては参考資料として渡したりすることもある。

申込時に学生から提示されるテーマは概して漠然としており、実施日当日にテーマを変更してくることも多い。また、実際にインタビューを重ね、文献の検索結果を通覧している途中にテーマを修正することは往々にしてある。職員側としては、その変更に対応しなくてはならぬが、必ずしもそうではない。事前準備の段階で、職員は主題に関する知識を深めることができ、検索の過程で自らが試行錯誤を重ね、検索結果からその分野に関する研究動向を把握することで、学生の突然のテーマ変更にも対応できる能力を身につけることができる。

なお、準備の段階で、探索方法に自信が持てない場合は、他2名の職員に助言を求めることもある。学生へのサービス水準を一定に保つために、職員間でのバラつきをなくす努力を怠らないようにしている。

V. 個別ガイダンスの実際

当日、図書館のカウンターで申し込んでいた学生と担当者が顔合わせをしてAV・PCコーナーの学生の希望する席へ移動する。雑談を交えつつ、担当教員名や研究テーマなど、申込時の記載内容の確認から始める。次いで、テーマに変更や追加点はないか、これまでに調べていることはあるか、すでに入手した文献はあるかなどのインタビューを行う。インタビューの過程では、学生の情報要求を滞りなく引き出すことが求められる。1年次から3年次に至る複数のオリエンテーションやガイダンスの過程で、職員と学生との間にはある程度の信頼関係が築かれているが、個別ガイダンスに臨む際には、レファレンス面接について長澤³⁾が指摘している「質問応答を効率的に運ぶための基本的姿勢」として、「相手を温かく受けとめるように接すること」や「要領を得ない質問であっても、それにじれないこと」などの留意点を常に心がけ、学生との間に親和感を醸成するようにしている。

個別ガイダンスで主に使用する文献データベースは、医中誌Web、JDreamⅢ、CiNii Articles、CINAHLなどである。過去3年間のガイダンス出席状況を踏まえつ

つ、技術的な指導が必要な場合はその指導も交えて、テーマに最適なデータベースを選択して検索を行う。検索結果から参考となる文献を見つけ出し、そのシソーラスを活用したり、別のキーワードを追加して絞り込んだり、共に考えながら検索を進める。場合によっては、準備段階で検索の過程を記録したシートを提示して、検索の流れを解説することもある。その過程で、学生が「このキーワードはちょっと違うような気がする」と違和感を覚えた場合、再度検索をして、その検索結果から別のキーワードを見つけ出すこともある。

学生へのインタビューの中で、しばしば意識的に行うのが、「差支えなければ」と前置きした上で、なぜそのテーマを卒業研究のテーマとして選んだのかという質問である。実習中の出来事から生じた疑問点であったり、興味を持った文献を複数読んでいて何か引っかかりを覚えたことだったり、学生によって課題を設定した動機はさまざまであるが、看護学の専門家ではない図書館員が、対話の中で、学生の疑問点や着眼点などを共有し、学生の形にならない要求を引き出す作業を行うことで、学生は、そもそも自分が知りたいと思ったことは何か、取り組みたいと思ったテーマの核心に触れ、自身の内部でリサーチクエスチョンが明確化されていく。これは意味付与論に依拠した「中立質問法 (neutral questioning)」を提唱したDervin⁴⁾らによる中立質問を利用したものである。ここでいう「中立質問」とは、利用者に多くの語りを求める開質問 (open question) の一種で、「はい/いいえ」や「これ/あれ」で答えられる閉質問 (closed question) とは対照的に、問題解決の手がかりを求めて利用者の状況等に焦点を当てて行う質問のことである。齋藤⁵⁾はこの技法に関して、利用者の有意味な物語の構成に関わるサービスとして「ナラティブ・ベイスト・レファレンス」とも呼ぶべきサービスであると指摘している。

学生が「何を疑問に思い、なぜそれをテーマにしたか」ということを聞き出すのは、テーマに関する文献検索からは迂遠なようであるが、こうしたやりとりの中で、ガイダンス申込時に示されていたキーワードやテーマとは異なる情報要求が言語化されていくことを実感している。大切にしているのは、学生の抱いた疑問点に共感し、その物語に興味を抱き、その疑問点を解くカギと一緒に探りたいという姿勢である。職員には、単に学生の話の聞くだけでなく、その話を自分の言葉で言いかえる力が求められる。

リサーチクエスチョンを明確にしていく過程では、ま

た、その疑問点の主題は何かといった視点と、それを言語化する行為も常に忘れないように心がける。学生は、ガイダンスに臨む際に、自分の研究テーマを表すキーワードを考えてくるが、インタビューの過程で、そのキーワードは実際には研究したいテーマを的確に表現したものではない、と判明することは往々にしてある。職員はインタビューを重ね、その都度、主題を表すキーワードを修正していく。レファレンスプロセスにおける主題分析について鹿島⁶⁾は、質問の主題を的確に表す統制語が見つければ、主題とその全体像を効率よく理解できるとし、主題分析の理解と実践こそが「人間にしかできない知的作業のひとつであり、図書館員の専門性の中核」だと述べている。個別ガイダンスは、学生に検索技術を教えるとともに、学生の真の情報要求を探りつつ、主題分析を行い、必要な入手方法を教えるといった、利用教育型のレファレンスであるといえる。

終了後は、先述の共有フォルダ内の申込一覧表に、実施した時間数を入力する。また、実施内容やガイダンス中に気づいた点を他2名の職員に伝える。

VI. 個別ガイダンスの評価

2008年度から2015年度までの参加人数の推移をみると、緩やかに増加している(図1)。実施初年度の2008年度は新年度の4月に入ってから企画・立案したこともあり、広報が十分にできないまま5月の連休に入ったため参加人数は少なかった。その後、毎年、実施に合わせてホームページに掲載するとともに、卒業研究担当教員にも一斉に告知メールを送信し、年度初めの学年別ガイダンスで学生に広報することで、認知度は徐々に高まった。ここ数年で大きな伸びを見せている要因としては、

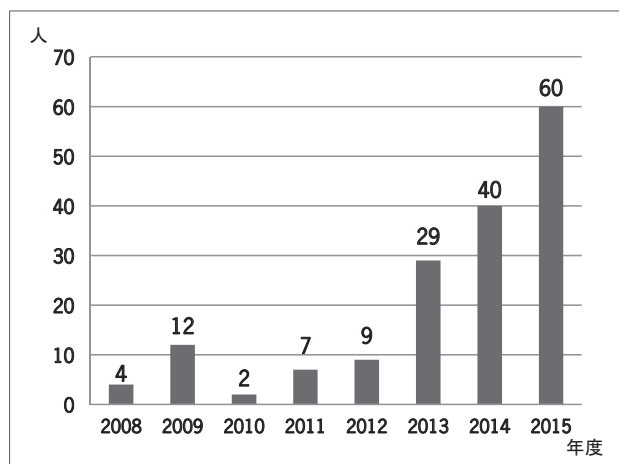


図1. 参加人数の推移

担当教員の協力によるところが大きいと思われる。教員からゼミ学生の参加状況について照会されることや、参加した学生から「先生からオーダーメイドガイダンスを受けるように言われた」という声が聞かれるようになった。教員は学生がテーマを決定する段階で、また文献をある程度収集したが十分ではないと思われる段階で、個別ガイダンスを受けるよう指示することが多いようである。なお、ゼミ別の参加状況にはバラつきが見られるため、未参加のゼミには担当教員へ情報提供し参加を促してもらうよう要請する必要があるが、今のところはいっていない。

また、実施場所のAV・PCコーナーはオープンスペースであるため、個別ガイダンスを実施している近くの席で自己学習している学生が、実際の様子を見て、後日申し込んでくることも多い。ガイダンスの雰囲気は思いのほか和気藹々としたものであり、それを見て、申込みに際しての不安が解消されるようである。オープンスペースで実施する予想外のPR効果である。また、参加したゼミ学生たちから、別のゼミへ口コミで広がって申込みが増える状況も見受けられる。

実施時間数は、参加人数にほぼ比例して増加している(図2)。しかし、学生1人あたりに要する時間は減少傾向にある(図3)。要因としては、担当者の分担分野をおおまかに決めることで、その分野の研究動向を把握し、類似テーマの相談への対応が容易になったことや、職員が経験を重ねることで、インタビューのスキルが向上し、対話している学生が研究のどの段階にいるかが分かり、適切な対応ができるようになったことが挙げられるだろう。なお、学生1人あたりにかける時間は減少傾向にあるとはいえ平均すると30分を超えており、加えて準備に要する時間もある。参加人数の増加に伴い、平日の午後

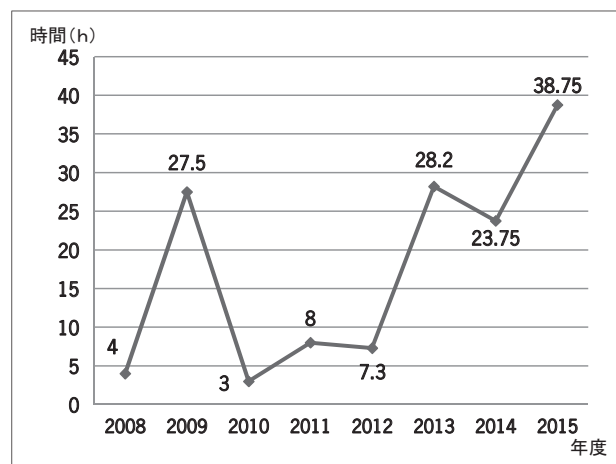


図2. 実施時間数の推移

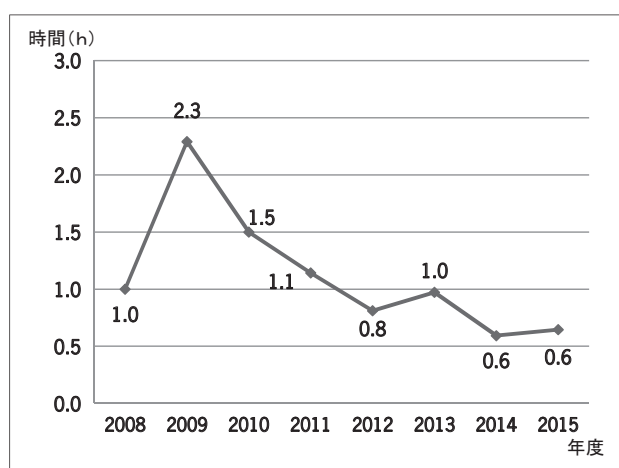


図3. 1人あたりの実施時間数の推移

の時間はほとんどこの業務に充てることとなり、職員の負担は増加している。

個別ガイダンス実施後の支援に関して、担当者は、参考となる文献を新たに見つけた場合、学生へ個別にメールで紹介したり、学生の学外文献複写の申込み状況を見て、追加の文献収集に関して助言をしたり、担当者ごとに工夫しながらサポートを続けている。情報収集の直接的支援とは異なるが、本格的に執筆・校正を行う10月から11月にかけて、論文作成上の形式や参考文献の記述等に関わる講習会として「卒業研究に関するWord講習会」も実施しており、追加の文献収集の相談の機会ともなっている。しかしながら、担当教員からの情報を積極的に収集していないため、支援した学生の研究の進捗状況については正確に把握しておらず、継続的な支援体制が十分であるとはいえない。

個別ガイダンスを実施する中で気づいたこともある。個別ガイダンス中、シソーラスを用いた主題検索を行う場面は多い。シソーラス検索に関しては、一斉ガイダンスにおいても一定の時間を割り、説明にも力を入れている部分であるが、学生はシソーラス検索の有効性を、ここで初めて気づく場合がほとんどである。シソーラス語やそれを用いた検索機能について学生は一応の理解をしているものの、どのようなときに使用すれば有効かということを真に理解できていないのである。一斉ガイダンスにおけるシソーラスの説明に関しては、工夫が必要であるといえる。諏訪⁷⁾は、個別教育と一斉講義との関係について、個別教育は「講義を点検・評価する機会」であり、個別教育と一斉講義の両者は、補い合い、また相

互にその基盤を提供し、強化し合う関係にあると指摘しているが、個別ガイダンスを通して、一斉ガイダンスの内容を見直し、修正する機会ともなっている。

VII. 今後の課題

今後の課題は、4、5月に個別ガイダンスを実施した後のフォロー体制の確立である。先述のとおり、実施後、担当者は工夫しながらサポートを続けているものの、個人の努力に負う部分が多い。組織的に支援を継続していけるような体制や仕組みを考える必要がある。

また、個別ガイダンスの参加率を高めるうえで、教員との連携は欠かせない。現時点では本学では未導入であるが、eポートフォリオ等を活用することで、教員と受講状況の情報共有が効率的にできるのではと考えている。個別ガイダンスに参加もせず、学外文献複写も申し込まない学生へのアプローチに関しても、担当教員からの情報を得て、適宜介入することが必要であろう。教員と情報を交換しながら、ガイダンス後の卒業研究に関する支援体制を確立する必要がある。

個別ガイダンスの実施にあたって、職員はかなりの時間を費やしており、業務量の負担は大きい。また、現在の職員体制が維持されているからこそ、継続できているサービスである。今後、このサービスを継続・発展させていくためには、現体制の維持とともに、他の業務の効率化が必須である。

参考文献

- 1) 伊東泰子. 日本赤十字九州国際看護大学図書館における利用教育について. 看護と情報. 2009;16:51-4.
- 2) 諏訪敏幸. 看護研究者・医療研究者のための系統的文献検索概説. 近畿病院図書協議会, 2013.
- 3) 長澤雅男. レファレンスサービス: 図書館における情報サービス. 丸善, 1995.
- 4) Dervin B, Dewdney P. Neutral questioning: A new approach to the reference interview. RQ. 1986;25(4):506-13.
- 5) 齋藤泰則. 利用者志向のレファレンスサービス: その原理と方法. 勉誠出版, 2009.
- 6) 鹿島みづき. レファレンスサービスのための主題・主題分析・統制語彙. 勉誠出版, 2009.
- 7) 諏訪敏幸. 情報リテラシー教育はレファレンス・ワークをどのようにその一構成部分とするか: 看護系院生・学生等を対象とした大阪大学生命科学図書館の経験から. 大学図書館研究. 2006;78:65-75.